

児童心理学と発達心理学

“児童心理学”という名称は、心理学の様々な領域の中でもかなりポピュラーな呼び名といえるが、多くの人がこの名にいだくイメージは、「何才頃にどういう成長を示すか、というような、児童発達の現象的記述の学問」といったものである。確かに今までの児童心理学はこうした傾向であった。しかし、最近では、仮説検証法等を用い、児童発達の原理を解明しようとする方向に変化してきている。

一方、発達心理学もごく近年まで、“かつての児童心理学の別名”といった感が強かったが、次第に心理機能形成のメカニズムの探究、行動の発生的究明を目先すものになってきた。

ここでは、こうした新しい動向をとらえた児童心理学、発達心理学書の中から、趣きの異なった3種を紹介してみたい。

I 児童心理学 依田新，東洋編

(新曜社 1970. 9)

児童心理学の入門的概論書の中で、実験心理学的な新しい動向を反映して編集されたのが本書である。構成は次の10章から成る。

1 章 児童観と発達	依田 新
2 章 乳児期の発達	岡 宏子
3 章 幼児から児童へ	津守 真
4 章 動機的側面の発達	高橋 恵子
5 章 知的機能の発達	藤永 保
6 章 発達をとりまく社会と文化	波多野誼余夫
7 章 発達の個人差	東 洋

8章 人格の展開 依田 明

9章 児童の臨床心理 古沢 頼雄

10章 発達研究と教育 永野 重史

1章では、児童観、児童心理学の歴史的変遷をふまえて、“成長と学習”“遺伝と環境”についての今日の考え方、研究法の解説を行ない、本書の基本的立場を示唆している。

2章では、乳児期の発達の意義を「ひとらしくなる過程」と考え、生活リズム、外界認知、運動、言葉、情緒の発達を、実証データに基づいて、神経生理学的観点から説明し、3章では、発達を「自己のひろがり、深まりの経験」と定義し、幼児期において、それがどのようなときに生ずるかを、具体的行動観察例をあげて解説している。

2、3章では、現象的記述による説明が中心であったが、4～8章では、理論的側面に重点がおかれている。まず4章では、動機的側面の発達を、依存、攻撃、達成の3つの構成概念によって考えている。普通、依存性は成長と共に減少するのが正常であるとか、攻撃的な行動は困ったことと考えられるが、ここで扱われる構成概念は、そうした価値的ニュアンスを持たない。例えば、依存性の発達とは、“依存の現れ方、対象などの質的变化”とみなされる。この視点から、依存、攻撃、達成の発達の様相、規定要因について述べられている。5章では、発達の知的側面が扱われる。今までの知能テスト万能の知能観に対する反省が、Gilfordの創造性研究、Hebbの知能観を背景に成されてきた状況をふまえ、本章では、知性を“記憶、思考、認識能力などを総合した情報処理能力”とみなし、その構成要因たる認知と記憶、言語、操作の発達について、Piaget、Vigotskyなどの理論をもとに解説している。6章では、発達を社会化の過程とみなして、オペラント条件づけ、モデリング、認知学習等の学習形態の発達過程における展開を概観し、学習の担い手となる、家庭、学校、マスメディアが、どのように社会化に寄与するかを、具体的に説明している。7章では、発達過程の分析には、個人差についての研究が必要なことを主張し、個人差を生ずる要因、個人差の安

定性などを問題としている。8章では、Freud の発達理論や、学習理論を背景に、児童期から第2反抗期である青年期を通して成人になるまでの過程を概観し、また、Lewin の人格発達理論、Allport による人格の成熟基準を紹介している。

9, 10章では、臨床、教育の現場とのかかわりあいにもふれている。9章では、発達的に障害のある児童についての知見と処遇、即ち、問題行動の種類、発現（要因、機制、形成過程）診断法が具体的に解説され、10章では、新しい教育研究との関連づけが、文化的阻隔児の教育を例に述べられている。

以上、大まかな紹介であるが、本書のアウトラインはつかんでいただけると思う。本書は、入門書としては理論的側面にかかなり重点がおかれており、現代児童心理学の全体的方向を示唆しているように思われる。

Ⅱ 児童心理学講座 全10巻 別巻1

（金子書房 1969～71）

本講座は、現代児童心理学の研究動向を、10の領域にわけ、各領域での主ないくつかのテーマごとに、それを第一線で研究している人々によって分担執筆されている。全11巻、4000ページに渡る内容を具体的に紹介するのは不可能なので、各巻名をあげることによって内容の大筋をつかんでいただき、何冊か読んだ限りの感想から、本講座の趣きが伝えられれば幸である。各巻のタイトルは次の通り。

1. 成長と発達, 2. 発達と学習, 3. 言語機能の発達, 4. 認識と思考
5. 知能と創造性, 6. 情緒・欲求・動機, 7. 社会的発達, 8. 人格の発達, 9. 社会生活とマスコミュニケーション, 10. 発達の障害と教育, 別巻. 児童理解の方法。

まず感じられるのは、全体的に平意な文章で、主要な理論も噛砕いて書かれていること。それも、数多くの実証データ、論文に基いて説明されているので、わかりやすく、初心者や専門外の人でも興味をもって読めると思う。

反面、筆者が70名以上に及ぶことから、その趣きもかなり異り、示唆的論文も多いかわり、表面的にまとまり過ぎたり、教科書風解説といったものもある。ともあれ、現代児童心理学のトピックが細かく網羅されているので、興味あるテーマの基礎知識、大まかな研究動向を知るには便利である。また、教育の実践的問題にも接近しているので、その方面の人にも役立つこともあると思う。さらに、別巻の「児童理解の方法」では、実験、観察、質問紙などの研究法について、具体的説明がなされ、注意事項が詳しくまとめられているので、初心者が、実際に研究を始める際に一読すると有効であろう。

Ⅲ 講座心理学 第11巻 精神発達 藤永 保編

(東京大学出版会1971.5.)

先の二書が、ある程度入門書的趣きをもっていたのに比べ、本書では、現代発達心理学の主要理論が体系的にまとめられている。構成は、以下の6章から成っている。

1章 序論	藤永 保
2章 認知の発達	笹本 至心
3章 思考の発達	斎賀 久敬
4章 言語の発達	永野 重史
5章 パースナリティの形成	柏木 恵子
6章 対人行動の発達	波多野誼余夫 高橋 恵子

1章では、現代発達心理学の問題点を中心に、新旧の考え方を対比させながら、研究動向を整理して、本書の導入となっている。まず、発達心理学の中心的争点となってきた「遺伝と環境」「成熟と学習」に関する問題の整理から、現在、発達研究上の基本的視点、前提の再検討が行われ、それに伴って方法論も変遷していることを述べて、発達研究の諸問題を次の6点にまとめている。

①発達段階とその移行：発達段階を認めようとしないS—R理論の立場

(Watson から近年の Bandura らの社会的学習説に至るまで)と、全面的に認める Gesell 流の段階説を両極に、様々の理論があるが、Piaget の理論(発達段階間の構造的な連続性、異質性の解明を主眼としたもの)が、今のところ最も完成したものといえる。②発達と教授過程：これは、認知的発達の研究問題として近年注目をあびているトピックで、Bruner の研究、Vigotsky の“発達の最近接領域”などを中心に、レディネスに関する新しい考え方がすすめられている。③初期学習と臨界期：②と関連して、発達と学習の相互依存性の問題から、初期経験、臨界期についての実証的研究が望まれている。④学習概念の変化：人間学習の特異性解明のためには、S—R 的学習理論に限界があることから、学習と発達の融合を目ざす、Piaget, Bruner の認知的学習理論、Hunt の内発的動機づけ、Gagné の学習の型分け等が注目されている。⑤認知機能の重視：②～④でわかるように、認知発達への関心が高まっており、Piaget, Bruner, Hunt, Hebb らがその代表的人物といえる。彼らは、発達初期の環境要因、教授過程の重要性を主張し、新しい教育観をうちたてようとしている。⑥発達理論の統合：最後に、今だ、つぎはぎ細工的状态にある発達理論を脱して、統合理論を樹立することの功罪を考えている。

こうした発達心理学の現状をふまえて、2 章以下では、認知、人格、社会性の発達についての基本的考察が展開される。

まず、2～4 章では、現在特に注目されている認知の発達について、知覚的側面、思考、言語の問題がとりあげられる。2 章では、ゲシュタルト学説の知覚形成過程に関する考え方にふれてから、その批判を通じて展開され、今日の主流となっている、Hebb の知覚形成過程図式、Piaget の知覚発達に関する考えを説明している。3 章では、Piaget の発生的認識論の解説と評価を、知能の発達と関連させながら行い、現代思考発達研究の動向を①Piaget に基く研究、②Bruner の研究、③Harlow, Kendler ら学習理論の側からの研究に分類して解説している。4 章では、Chomsky による変形文法という新しい言語理論を中心に、最近急速に発展している、言語の発生過程

に関する研究が概観され、さらに、母国語体系の認識体系形成に及ぼす役割という点から、言語の形成と社会性、民族性の形成との関係にふれ、以下の章への橋渡しをしている。

5章では、パースナリティの形成を社会的学習としてとらえ、学習理論によって解明しようとする近年の試みが整理されている。人格形成を2次的動機づけの成立とみる、動因低減説からの接近(Mourer, Sears ら)に始まりそれに対する反証(Harlow のサルの子の愛着についての研究、刻印づけのデータ等)をふまえて、内発的報酬による学習、観察学習、モデリングの考え方が論じられ、さらに、認知説の系統として、Bruner, Piaget や、現象学派(Rogers ら)の考え方が紹介されている。さらに、母親から文化に至る環境要因が、それぞれの理論によって、どのような役割として扱われているかという点にもふれている。

6章では、社会性の発達の中で、対人行動の発達に焦点を絞り、発達初期での社会的関係への参加が、いかに行われるかという問題を中心に、青年期までの対人行動の発達の様子が、具体的データをもとに説明されている。

以上、ざっと眺めただけでも、本書が、現代発達心理学の主要理論を体系だててまとめていることが、おわかりいただけると思う。しかし、一冊の本にこれだけの内容を盛り込んでいるので、個々の理論が細かく、丁寧に解説されているというわけではない。より深く理解するには、各章末の引用文献を参考にしながら勉強するとよい。こうした意味で、本書は、発達心理学を学ぶ手がかりの書として適当なものといえよう。(高木 和子)